

王 智新著『近代中日教育思想の比較研究』

大塚 豊（広島大学）

本書は、著者が東京大学に提出した博士学位論文を基に刊行されたものである。世間で一流の日本語の使い手と見なされている外国人でも、その書いたものとなると甚だ多くの誤りが見られるのを頻繁に経験する。それを考えれば、本書のような内容が、著者には「外国語」である日本語によって見事に書き上げられたことに対して、そのために払われた著者の、おそらく長年にわたる努力や研鑽に対して、まず最大級の賛辞を送りたい。

本書の構成は、第一章で研究の「課題と方法」を述べた後、第二章では、中国側から張之洞と蔡元培の二人を、そして第三章では日本の代表的思想家である森有礼、福沢諭吉を取り上げて、各人の思想形成における西洋との関わりを論じ、第四章では、前2章の分析を踏まえ、日中両国の近代教育思想形成のあり方を比較するというものである。

さて、近代教育思想に関する比較という本書全体のモチーフからも当然ながら、著者はまず「近代化」についての日中両国での主要な議論をレビューしている。日本については、1960年のいわゆる箱根会議を中心に大まかに述べ、日本の近代化はそれが内包するアジア諸国への「侵略性、掠奪性を排除しないまま」では、モデルとしての普遍性をもちえないと指摘する。他方、中国に関してはより多くの紙幅が割かれ、近代化論争が要領よく纏められている。但し、著者も言うように、そうした論争から提出された近代化の基準が上記箱根会議とほとんど変わらないものであったり、百年以上も前の「中体西用」論の焼き直しに思えるものであったりするのはいささか失望の感を禁じ得ない。さらに、著者は「近代化は即ち人間の近代化であり、何よりも先ずは、人間の社会関係の近代化である」と考え、その関連で「特に代表的な人間の思想形成過程の解明」の重要性を主張する。そうした代表として選ばれたのが上記4人であった。だが、著者の言うように、「人間の近代化は近代的な社会関係の中においてのみ実現可能なものであるから、社会の近代化と人間の近代化は同時に進行する」のであろうか。時代を代表する人物には、俗に言う「時代を先取りした人間」も含まれ、そうした人間こそがまさしく社会の一足飛びの飛躍に貢献してきたのではないかと思うからである。

本書の7割弱が割かれた4人の代表的人物の思想形成

過程の記述では、まず張之洞について、彼が中国の封建思想はそのまま維持しながら、一方で西洋の学問を取り入れようとし、崩れかけた清朝体制の保持を図り、そこから抜けられなかった限界が明らかにされている。ただ、「中体西用」といっても、中国の学問を核とし、西洋の学問はそれを補うものにすぎないとした一般的な論者とはひと味違い、張が「両者のいずれに偏ってもいけない」と考えたとの指摘は新しい。また、洋務派である張の中国国内での評価は1950年代の自主独立路線の下では徹底した批判対象であり、70年代以降の対外開放政策下に急速に上がったという。著者はこうした今日の価値基準を以て歴史上の人物や事象の評価を下すことに反対し、「張之洞を彼の生きた時代の中で分析する」ことを試みたとする。同様に、蔡元培についても彼の「生きていた時代の中で、解明していきたい」とする。一見ごく当たり前のことにも思えるが、所定の評価に囚われない姿勢は著者自身の留学の効果といっは言い過ぎであろうか。張之洞と蔡元培の思想形成過程を分析した末、筆者は前者を「中国近代半封建主義半植民主義教育の創始者」と位置づけ、近代教育思想の形成は蔡元培によって担われたと結論づけている。

ところで、西洋近代思想は中国では日本経由で導入された部分が少なくないが、著者もまた蔡元培と森有礼、井上圓了、蟹江義丸、樽井藤吉、木村鷹太郎、久保得二らとの関係に言及し、蔡の精神形成における影響を別出しようとする。蔡の教育論については、「教育独立論」、学と術を区分する論、当時の世界的潮流であった新教育の考え方と軌を一にする児童中心、個性尊重の発達論、美育および公民道徳教育を重視したカリキュラム論などが具体的に説明されている。しかし、それらと日本ないし日本人との関わりという核心的議論が見あたらない。とくに蔡と森との関係の部分では、著者は、在米外交官であった森が出版した *Education in Japan* から蔡が受けた影響に着目している。蔡が同書の漢訳本『文学興国策』の「存在を聞き知ったことはまちがいないと思う」と述べられ、後年に蔡が教育総長として「打ち出した一連の措置と教育方針、『軍国主義』教育の提唱などからも日本教育、特に森の教育思想、政策の影響があったという痕が数々見られる」という。しかし、具体的に森のいかなる考えから影響を受けたかについては、残念ながら細かく分析されていない。森以外の各日本人との結びつきが蔡自身の日記に基づき、かなり解明されているのとは対照的である。なお、『森有礼全集』中の同書を見直しても、森が実施した米国有識者へのアンケートに対するガルフヒールド下院議員からの回答などに、国

民の保健衛生意識の向上、ひいては頑強な兵士の育成に教育の果たす役割、つまり「軍国民教育」との関わりを匂わず箇所がわずかに見られるのみである。

日本人思想家の代表として取り上げられた2人のうち、森有礼については、主として林竹二、大塚孝明氏らの先行研究に依りながらではあるが、森の教育思想形成に関わる事項のみに限定することなく、宗教自由論、男女平等の思想などにも言及され、彼の思想形成の過程を多角的に捉えようと努力されている。しかし、それに倍する紙幅が教育思想の形成に関する記述に充てられていたならとの思いが残る。つまり、学問と教育とを峻別し、また体育を重視するなど森の教育論が形成される背景に関して先行研究を越える知見を望みたい。同様のことは福沢に関する章でもいえる。だが、森も福沢も狭い意味での「教育思想家」ではないが故に、教育思想面での影響関係に限定して明快に分析することがもともと無理なのかもしれない。「中国における福沢諭吉の教育思想の影響」という興味深い表題の部分も、影響を受けた者として具体的には黄遵憲、梁啓超、張之洞が挙げられているが、彼らもまた福沢の「教育」思想の影響を受けたというよりも、広くその西洋文明に対する姿勢を高く評価したというべきで、表題との齟齬をいくぶん感じる。

現実には「近代化＝西洋化」の図式が動かし難いものであり、教育を含む思想・文化の比較研究が行われる際には、中国でも日本でもそれぞれの「西洋化」の過程や西洋に照準を合わせた研究がこれまで主であった。しかし、これでは、例えば中国と非西洋の国々との区別が見えず、不十分であり、「共通の文化背景を持つ異なる思想文化の比較研究」が必要であると著者は考える。中国で生まれ育ち、日本に学んだ著者のような研究者こそ、西洋、中国、日本を三つ巴の形で比較することを通じて、「中国の近代化の特殊性と日本の近代化の特殊性を、別の次元から捉え直す」のに相応しく思われるし、第四章の「近代中日教育思想についての比較」は、本書の核に当たるところであろう。

西洋の衝撃に対して「中国と日本は同じ反応を示さなかった。その時の反応の違いが、今日の中日間の差をもたらした」と著者は考え、そうした異同を比較する。まず、日中の「相似点」に関して、①社会的成熟度、②目標・目的、③教育思想の構造、④教育思想形成過程、⑤内容の諸点から分析する。これらのうち、西洋への対抗と祖国の防御といった目標や、封建主義批判および実学教育重視という内容上の類似点は容易に納得がいく。また、それを「教育」思想の構造と呼びうるかどうかは別にして、上からの大衆支配欲と下からの解放要求ならび

に西洋に抗して民族独立と国家の安全を確保したいという「支配階級及び大衆との共通の使命感」という三重構造も比較的理解しやすい。しかし、他の諸点は評者として若干の疑問なしとしない。例えば、江戸末期、明治初期の日本人の識字能力は欧米での先行研究の評価よりも低く、一方、中国人の識字能力や出版物普及の程度は通常考えられるよりもずっと高いとして、日中の「社会的成熟の程度は同様であった」という考えが示されている。しかし、従来の通説に反する断定が余りにも簡単に下されすぎていないだろうか。また、蔡、張、森、福沢ともに儒学の伝統教育を受けた上で西洋の思想・文化を吸収した点は同一だが、それはあくまで個々人の思想形成に影響したプロセスであり、社会なり国全体としての当該時代の教育思想とイコールかどうかとも疑問が残る。

次いで著者は日中間の「相違点」も明らかにしている。近代学制を敷くのに、中国が日本に比べてスタートを切るのが遅れた原因は、西洋の攻撃による被害は中国のほうが断然大きく、従って対西洋の敵愾心も大きかったことだという。そして、中国における近代教育思想形成の直接動機は、西洋の衝撃というよりも、むしろ日清戦争で小国日本に敗れたショックのほうであったとの指摘は、西洋・中国・日本の相互関係を考える重要な点である。但し、中国では1860年には既に近代的学校の京師同文館が創設され、その先進的情報を徳川慶喜が英国公使から得ていた史実もある。問題は一旦早いスタートを切った中国がなぜ立ち止まったかである。異文化吸収方法に関して、日本人は全面的であるのに対して、中国人は選択的、しかも「理論的には、新しいもの、西洋のものを沢山取り入れようと抽象的に理解していながらも、心情的には伝統の方に傾く」とされ、歴史や伝統の重さの違いから、日中間では外来思想摂取の迫りに違いが生じるという。結局、抜きがたい中華思想のなせるところという理解は短絡に過ぎようか。なお、国土の大小や人口の多寡が思想啓蒙の難易度に決定的な影響を及ぼしたという指摘はナイーブだが説得力がある。

思想を担う主体に関して、著者は日本人知識人に実践や行動の伴わないことが伝統になっていると述べる一方、中国の知識人は依存性が強すぎるという弱点を指摘する。そうした中国人知識人の依存性は今も昔も変わらないと述べ、叙述が一举に1989年の「天安門事件」に下るあたりに、同じ中国人としての著者の苛立ちにも似た感情が読みとれる。ところで、思想を担う主体に関して、著者は中国人思想家が西洋との関わりの深さにおいて日本人に及ばないとするが、たまたま著者が取り上げた張之洞や蔡元培がそうであったとしても、果たして一般化し

うであろうか。著者も名を挙げており、西洋思想の伝達者かつ教育家であった嚴復は本格的学校システムを含む教育論を展開しているし、また中国人として初の米国留学生であった容闈も森などと比較するにはより好適な人物かもしれない。

著者の視角からは不十分に見えるらしいが、現実には従来相当の研究の蓄積がなされている日中の4人の人物を扱うのは容易なことではなかったろうと思う。果敢な挑戦を多としたいし、本書の刊行は著者個人の喜びであるとともに、著者の後に続く多くの留学生に啓発と希望の光を与える道標となったと確信する。願わくば、日本人にはない斬新な目と意識をもった留学生たちが、本書の著者に続いて日本の教育学界に新しい風を吹き込んで欲しいものである。

(勁草書房刊 1995年12月発行 A5判 224頁
定価4,944円)